

アライバル  
ARRIVAL

ショーン・タン著 河出書房新社 2011

今年の読書運動は「新旧」です。

今年、時代は「平成」から「令和」へと変わりました。

あたらしい時代のはじまりの年ですね。

今月紹介する本も、慣れ親しんだ土地を離れなければいけないことになり、あたらしい土地で、あらたな生活をスタートさせたある男の人の物語です。

男は、愛する妻と娘を故郷に残し、1人あたらしい土地へと移民するところから物語が始まります。どうして、移民しなければならないのか、理由はわかりません。今住んでいる国が男の人の家族にとって住みづらい土地になったのかもしれませんが。まずは、男の人だけが、次に住む土地の下見をするために、1人であたらしい土地へ渡ります。あたらしい土地では、何もかもが今までの土地と違い、困惑するばかり...言葉が通じないなか、身振り手振りでなんとか家をさがし、そして仕事も見つける。手を差し伸べてくれた優しい人たちもいました。そして、あたらしい土地に馴染んだころに、ようやく妻と娘をあたらしい土地へ呼び、家族3人でまたあたらしい生活をスタートさせます。この土地には、この男の人と同じように移民の人たちがたくさんいて、この男の人のあとからも次々とあたらしい移民の人がやってきます。

そして、この男の人も自分が手を差し伸べてもらったように、あたらしい移民の人に優しく手を差し伸べてあげるといふ優しいおわり。

実は、この本、文字がいっさいありません。すべて絵でおはなしが進んでいきます。しかし、この本のイラストを手がけたショーン・タンの、細やかでいいねいなコマ割り、人物の表情描写は、文字がなくても、情景、セリフがページから聞こえてくるよう。表情描写はほんとうに圧巻で、妻と娘との別れの悲しい表情や、あたらしい土地でなにも勝手がわからず困惑した表情、そして、妻と娘と再会したときの笑顔、その表情ひとつひとつが読み手にググッと語りかけてきます。また、その土地の言葉をあらわした暗号記号のような文字、1人に1体、動物?キャラクター?のような謎の生き物がいる、あたらしい土地の描き方や世界観がとてもファンタジックなところはあたらしい土地での困惑、とまどいといった心情をより助長させている部分のように感じます。まるで一本の壮大な映画をみているようです!

今までの土地との別れ、あたらしい土地でののはじまり、そして、再会...この流れを見事に、いいねいに描いているショーン。彼は、さまざまな国や時代の移民の方々が話してくれた体験からこの物語の着想を得たそう。表情や心情の丁寧さ、リアルさはここから来ているのかもしれませんがね。

新しくなにかが始まる、あたらしいというものは、そわそわ以上に困惑や不安もあります。それをこの本はいいねいにしっかりと描いてくれています。

令和の時代はまだ始まったばかり、困惑や不安、問題もたくさんあります。

しかし、この男の人のように、誰かに手を差し伸べる

優しい気持ちを忘れず、あたらしい時代を生きてい

きたいですね。